

2024年度同志社大学司法研究科

後期日程入学試験問題解説

小論文

第1問（配点：40点）

本問は、文章を読解する能力及び読み取った内容を問いに則して表現する能力を試している。

採点に際しては、以下の点を中心に評価した。

・課題文1から、演繹型思考と帰納型思考の内容を読み取り、説明することができるか。

・日本の近代化において演繹型思考が影響力をもったと課題文1の筆者が考える理由を、2つ以上読み取り、説明することができるか。

・問いに対応する形で文章を書くことができるか。

【解答例】

演繹的思考とは、上位の抽象命題を所与のものとし、その抽象度を下げて下位に適用していく思考をいう。これに対し、帰納的思考とは、現実の観察から得られた知識をもとに、事実を積み上げながら理論化を行う思考をいう。日本の近代化において演繹的思考が影響力をもったと考える理由として、①日本に対応物のない観念や制度を迅速に導入すべき必要から、外来の知識の学習を頼りに演繹的思考によって制度をつくりだすしかなかったこと、②近代日本の法制度を整備した官僚たちは、欧米の法体系についての理解を進め解釈を深める法学的知識を基礎としていたと考えられること、③近代日本の中央集権制が演繹的思考と親和性が高かったこと、が挙げられている。（304字）

第2問（配点：30点）

本問は、文章の読解能力及び読み取った内容を問いに則して要約・表現する能力を試している。

採点に際しては、以下の点を中心に評価した。

・課題文1から、アクティブ・ラーニングという教育政策の進め方における問題点を2つ以上読み取り、説明することができるか。

・問いに対応する形で文章を書くことができるか。

【解答例】

第1に、外来の教育用語を輸入した概念であるアクティブ・ラーニングの日本語訳である「主体的・対話的で深い学び」は、言い換えや例示が示されるにとどまり、現場においてどのように実践すべきかが不明であるという問題がある。第2に、そのような中途半端な演繹しかなされていないにもかかわらず、教育政策が功を奏しないのは現場の理解を促す「周知・徹底」が不十分なためだとして、政策の成果の測定や改善・反省が加えられていないと

という問題がある。このように、課題文1によれば、アクティブ・ラーニングという教育の進め方には、演繹的思考が十分に行われておらず、加えて帰納的思考による政策立案へのフィードバックも行われていないという問題がある。(307字)

第3問 (配点：30点)

本問は、第2問で問われた課題文1の筆者の視点を、別の具体例にあてはめる能力を試している。

採点に際しては、以下の点を中心に評価した。

・課題文1の筆者の視点をウェルビーイングの向上という別の具体例にもあてはめることができているか。

・演繹的思考において十分に演繹を行うべきであるという視点と、帰納的思考に基づく政策立案へのフィードバックをすべきであるという視点を示すことができているか。

・問いに対応する形で文章を書くことができているか。

【解答例】

課題文1の筆者は、アクティブ・ラーニングの実施過程について、演繹的思考が十分になされていない点を批判している。この視点からは、ウェルビーイングの向上という教育政策を進めるにあたっては、外来の教育用語を「心身の健康と幸福」という日本語にするだけでなく、演繹を十分に行って、具体的な現実との対応関係を示すべきである。たとえば、心身が健康であるとはどのような状態をいうのか、どのような状況の子供たちに誰が何をすべきかを示すべきである。また、課題文1の筆者は、アクティブ・ラーニングの実施過程について、帰納的思考に基づくフィードバックが封じられている点を批判している。この視点からは、ウェルビーイングの向上という教育政策を進めるにあたっては、現場がその言葉を「しっかり消化する」だけでなく、現場の実態を把握し、それらに基づいてウェルビーイングの向上という政策の成果を検証し、改善や反省を加えることが必要である。(401字)